

現代の子どもの生活技術の実態 VI

○村越 晃 (目白大) 谷田貝公昭 (目白大) 伊藤野里子 (目白学園女子教育研究所)
 高橋 弥生 (子どもの生活科学研究会) 村田 幹男 (横浜市立日下小) 芹澤 奈臣 (平塚市立八幡小)
 松川 秀樹 (目白学園女子短大) 芹澤 美代 (茅ヶ崎市立今宿小) 室矢 真弓 (海老名市立有馬小)
 春田 裕紀子 (子どもの生活科学研究会) 生駒 恭子 (いわき市ほうとく幼稚園)

1. はじめに

価値観の多様化、子育ての過剰情報、人間関係の希薄化等々大人社会の混雑が、もろに子どもたちに影響を与え、その結果、意識や行動面の消極性、社会性の発達未熟や自己自立への立ち遅れ、そして更に、日常生活における生活習慣や生活技能の低下という現象を惹起してきている。特に、日常生活に必要な様々な能力の欠如はまさに生きる力の弱さを物語っており、その要因は生活体験の不足に伴うものであることが容易に看取される。

子どもの生活技術については、我々が様々な実技調査を通して、子どもの手さばきが萎えてきていることを指摘して久しい。最初のそれが「指・手話の巧緻性の研究」で、日本保育学会第31回大会(1978年)であるから20年近くなる。その後も各種調査を実施し、学会、マスコミ等を通じて警鐘を鳴らし続けてきているが回復の兆しはみえない。

そこで今回は、子どもの実態と共にその背景となる大人社会の実態をも明らかにしようと試みた。以下その報告である。

2. 調査の概要

○調査方法 調査内容に示す各動作について、調査者(2名以上)の目の前で一人一人個別に実施させ、主に三段階の判定をするという方法をとった。また、実技経験の有無や遊び、親子共同行動、生活企画能力、共同生活能力、自己価値観等を問うた。

○調査対象 鹿児島県鹿屋市・根占町、青森県弘前市、栃木県国分寺町・岩舟町、埼玉県岩槻市、東京都新宿区の小学生から大人まで2,519名を対象とした。年齢分配は表1の通りである。

○調査期間 平成9年8月中旬～11月中旬

○調査内容と判定基準

①ナイフで鉛筆を削る(2分間)

表1 年齢分配 (人)

	小学	中学	高校	大学	20代	30代	40代	50～	合計
男	371	194	93	135	84	108	105	90	1180
女	411	206	114	175	94	133	130	76	1339
計	782	400	207	310	178	241	235	166	2519

- a. 削り口の長さ、削り口の面のなめらかさがだいたい鉛筆削器で削ったときと同じようになっている
- b. 削り口の長短はあるが、削り面はだいたいなめらかになっている
- c. a、bとも異なる削り方になっている。芯が削られていない。鉛筆として使用できない

②ノコギリで板を切る(2分間)

- a. 線からはみ出さないで切り落とすことができる
- b. 一応切ることができるが、線からのズレがある
- c. 切り落とすことができない

③マッチで火をつける

- a. 3～4本の指でしっかり持って火がつけられる
- b. 火がつけられる
- c. 火がつけられない

④ひもを結ぶ(1動作30秒、かた結び、花結び、各前後)

- a. 正しく結べる
- b. 縦結びになる
- c. 結べない

⑤釘を板に打ち込む(時間1分以内)

- a. 曲がらず最後まで打ちこめる
- b. 途中で曲がるが最後まで打ちこめる
- c. 途中まで、または全く打てない

⑥箸を使う

- a. 伝統的な持ち方で使える
- b. 一見伝統的な持ち方をしているが指(特に中指)の使い方が異なる
- c. 独自の持ち方をして使う

⑦鉛筆を使う

- a. 正しくもって使える
- b. 人差し指または親指に力が入り曲がる。親指が人差し指より先に出る。
- c. a、b以外

⑧雑巾を絞る

- a. 雑巾を前後にして逆手でねじって絞る
- b. 雑巾を左右にして順手でねじって絞る(a、b混合も含む)

表 2 各動作の実技判定「a」 (%)

	小学	中学	高校	大学	20代	30代	40代	50～
ナイフ	1.9	7.0	8.2	15.8	16.4	28.8	32.0	35.5
ノコギリ	9.7	40.2	40.6	43.2	41.2	50.8	53.2	55.2
マッチ	14.2	30.9	37.5	40.3	52.3	76.9	88.5	94.5
紐かた	前	9.5	12.8	18.8	29.4	35.0	51.5	68.4
	後	12.4	16.3	19.3	27.2	27.7	38.8	48.1
紐はな	前	40.6	59.3	65.7	68.4	83.1	86.7	87.6
	後	17.9	32.1	36.4	38.8	54.8	69.0	69.5
釘	29.0	52.8	54.7	55.6	72.3	77.1	82.9	84.9
箸	15.7	23.1	23.7	29.0	46.6	52.9	53.0	65.2
鉛筆	4.2	5.5	7.2	7.6	8.5	16.0	20.6	38.5
雑巾	23.0	33.9	36.7	38.7	48.3	62.9	72.8	76.2
生卵	52.8	57.4	63.8	70.3	70.2	71.3	76.2	75.3
缶詰	26.5	59.8	69.0	79.2	88.8	90.9	94.4	83.0

c. a、bのいずれとも異なる

⑨生卵を割る

- 卵を何かに打ちつけて、そのきず口を手前にしそこに両手の親指をあて黄身をこわさずに割る
- aの方法であるが、そのきず口に親指以外の指あるいはきず口を上にして、そこに両手の親指をあてて割る。または黄身がこわれる
- a、b以外の割り方

⑩缶詰を開ける（時間2分）

- 8分の7以上開けて、ふたを開く
- 途中までしか開かない
- ほとんど開かない

3. 結果と考察

各動作で「a」と判定された調査結果を一覧にしたものが表2である。各動作とも加齢にともないできる割合は上昇しているが、大人たちの生活技術もけっして高いとは言えない現状であることが窺える数字である。

一般の精神発達検査作成と同じく、同一年齢段階の70～75%の者が満足したとき自立とすると、「マッチで火をつける」が30歳代、「ひもかた結び前」が50歳代、「ひも花結び前」が20歳代、「板に釘を打ち込む」が20歳代、「雑巾を絞る」が40歳代、「生卵を割る」と「缶詰を缶切で開ける」が大学生で自立している。「ナイフで鉛筆を削る」「ノコギリで板を切る」「ひもかた結び後」「ひも花結び後」「箸を使う」「鉛筆を使う」では、自立はみられなかった。

今までに小学生の生活技術の実態については低い次元で推移してきていることを報告してきたが、今回も同様の結果であった。中学生、高校生、大学生の生活技術の実態については今回初めて（箸の使用を除い

て）実施したが、ナイフの使用、ひも結び、箸や鉛筆の使用、雑巾絞りなど小学生と比べても大差ない割合で推移している。

今回の調査で悪い結果であったのがナイフの使用（全体で判定a 13.8%）と鉛筆の使用（全体で判定a 10.2%）であった。特に鉛筆の使用では女子の割合（全体で判定a 5.4%）が低かった。ナイフで鉛筆を削るという動作は最近ではあまり経験されない技術であり、できないのもうなずけるが、鉛筆を持って使用する動作は日常的に行われている行為である。経験していない

からできないばかりでなく、日常的に経験している動作でもまともにできないのが現状である。

箸の使用に関しての調査は、我々が1984年に2歳から94歳まで9152名に実施している。その調査と今回の調査を判定aで比較してみると、20歳代では前回52.2%、今回46.6%、30歳代では前回60.3%、今回52.9%、40歳代では前回68.5%、今回53%で明らかに後退現象を示している。

20歳代後半から40歳代前半で、今回の調査をまとめてみると、「マッチで火をつける」「ひも花結び前」「釘を打ち込む」「生卵を割る」「缶詰を開ける」は判定aが70%を越えるが、「ナイフを使う」27.9%、「ノコギリを使う」50.1%、「ひもかた結び前」51.5%、「ひもかた結び後」38.5%、「ひも花結び後」66.3%、「箸を使う」45.3%、「鉛筆を持つ」13.7%、「雑巾を絞る」61.7%で7割に達しない。まさにこの年代は子育ての最中の時代である。つまり、現代の幼児や児童の親は、子のモデルになりえているとは言い難い現状である。

4. おわりに

今回の調査は、子どもの背景にいる大人の生活技術の実態に触れてみた。技術の難易度や経験の有無もあろうが、大人ができないものは子どもにもできない。そして、できない子どもが年齢を重ね親になる。どこかで大きな歯止めが必要である。

生活技術も世の中の流れとともに変化していくものであるが、加速度的な凋落は、生きる力そのものの弱さを吐露している感じがしてならない。例えば、ナイフが危険なのではなく、ナイフを使えない、使い方を知らない心や手が危険なのである。